

英語の中間構文

—先行分析とその問題点—

柘 植 美 波

1. はじめに

英語の主要構文とされている表現には、受動文や関係節、不定詞節など数多くある。次のような構文も英語でよく見られると言われている。

(1) This book reads easily. (García dela Maza (2011: 167))

(1) は「この本は簡単に読める」という解釈を持つ。この種の表現の特徴は動詞が他動詞であるのにも関わらず、主語が読むという行為をする agent (動作主) でなく、theme (動作を受ける対象) の意味役割を持つ「本」であるということである。(1) のような表現は middle construction (中間構文, 以下 middles) と呼ばれる。これは表面上、自動詞であり 1 つの項をとっているため、ergative construction (能格構文, 以下 ergatives) と passive construction (受動構文, 以下 passives) に似ている¹⁾。この構文は ergatives と passives の中間の性質を持つということから、middles と名付けられている。松瀬・今泉 (2001) によると、同表現は学校文法では取り挙げられないが、商品の使用説明書や広告文などに多く用いられると言われている。

この研究の目的は、middles に関する先行研究を参考に、その構文の詳細な特徴を分析することである。加えて、middles に似ている構文と比較しながら、(1) のような構文がどのように派生されるのかを考える。さらに、先行研究の問題点について議論していく。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 節では middles の特徴や派生方

法についての先行研究を紹介する。第3節では先行分析で明らかにされている middles の特徴に関する問題点や提案を述べ、第4節では結論を述べる。

2. 先行研究

第2節では middles に関する先行研究を紹介する。まず2.1節で、middles と ergatives の比較について論じている研究を見ていく。その代表的な論文に Keyser and Roeper (1984) (以下、K&R) があり、middles と ergatives の特徴の違いや派生方法を概観する。さらに、Fagan (1988) による K&R の主張に対する反論について見ていく。2.2節では、García dela Maza (2011) による middles の意味的かつ語用論的性質を取り挙げ、2.3節では Fellbaum (1985) による middles に現れる副詞に関する分析を概観し、2.4節では Levin (1993) の分析を取り挙げる。最後に2.5節では、2.1節から2.4節まで見てきた一連の先行研究をまとめ、現時点の問題点や矛盾点を指摘する。

2.1. Middles と Ergatives の比較

middles は他の構文と比較されながら、その特徴について説明されることが多い。その比較対象の構文の代表例として ergatives がある。例えば、(2) のような middles と (3) のような ergatives がある。

(2) Bureaucrats bribe easily. (K&R (1984: 381))

(3) The ice melted. (K&R (1984: 381))

双方の構文で現れる動詞 *bribe* と *melted* は、表面上自動詞である。(2) は「官僚は賄賂を受けやすい」ということ、(3) は「氷は溶けた」という意味を表す。従って意味について着目すると、両方とも主語の θ -role は theme であるということが明らかである。この2つの構文は一見したところ、よく似ているため、比較されることが多い。しかしながら詳しく分析していくと、この2つの構文には数々の相違点がある。

本節では、K&R と Fagan (1988) による middles と ergatives の比較について見ていく。

2.1.1. Keyser and Roeper (1984)

K&R は middles と ergatives を比較し、それぞれの特徴や派生方法を述べている。以下、K&R のポイントをまとめる。middles は syntax で派生され、ergatives は lexicon で派生される。さらに、middles は統語で transitive であり、ergatives は統語で intransitive であると分析される。middles と ergatives の違いは以下のように指摘される。

まず、middles は generic sentence (総称的な文) のみで使われ、(4) のように特定の event (事象) を示すことができない。

(4) [?]Yesterday, the mayor bribed easily, according to the newspaper.
(K&R (1984: 384))

(4) では、*Yesterday* や *according to the newspaper* によって特定の event が示されているが、これらの句があることにより容認度がやや低くなる。

特定の event を表す典型的なケースが2つある。1つ目は、命令文や呼びかけ文である。ergatives は (5a) のように、命令文や呼びかけ文で起こることができるが、middles は (5b) のように起こることができない。従って、middles は ergatives と異なり、事象を表さない。

(5) a. Sink, boat!
b.*Wax, floor! (K&R (1984: 384))

2つ目のケースは進行形の文である。ergatives は (6a) のように進行形の文で起こることができるが、一方 middles は (6b) のように起こることができない。ここでもやはり、middles は事象を表さないことが確認される。

(6) a. The boat is sinking.
b.*Chickens are killing. (K&R (1984: 385))

この2つのケースを見ると, middle verb (middles で使われる動詞) は, 動詞 *know* のような stative verb (状態動詞) のような特徴を持つ。

2つ目の違いとして, middle verb は副詞と共に起さなければならないが, ergative verb (ergatives で使われる動詞) は副詞と共に起さなくても文法的に正しい文になることが指摘できる。

(7) *Bureaucrats bribe. (K&R (1984: 385))

(8) The boat sank. (K&R (1984: 385))

(7) は middles に関連する文であり, (8) は ergatives に関連する文である。(7) のように middles に副詞がない場合は非文法的な文となる。一方, ergative verb と副詞の共起は任意であり, (8) のように副詞がない場合も受け入れ可能となる。

3つ目の違いとして, ergatives は *out-* 接頭辞付加を受けるが, middles は *out-* 接頭辞付加を受けるものと受けないものがある。*out-* 接頭辞付加とは, lexicon の中で適用される規則である。接頭辞 *out-* は自動詞, または, ゼロ目的語の他動詞に付き, 「～にまさる」という意味の他動詞を形成する。例えば, (9) のような ergatives に関する例文がある。

(9) a. We bounced the basketball.

b. The basketball bounced.

c. The basketball outbounced the baseball. (K&R (1984: 393))

まず (9a) の他動詞の構文に ergative formation を適用し, (9b) のような ergatives を形成すると考えられる。そして, (9b) の ergative verb である *bounced* に *out-* 接頭辞を付加すると (9c) のようになり, 文法的に正しい文となる。(9a) から (9c) の間に適用された ergative formation と *out-* 接頭辞付加は lexicon の中で行われると考えられる。これより, ergatives は lexicon で形成され, *out-* 接頭辞付加が適用するということにより, ergative verb は自動詞であると言える。一方, middles に関する例文を見ると, ergatives と異なる点がある。

- (10) a. They maneuver the Russians easily.
 b. They outmaneuver the Russians easily.
 c. The Russians outmaneuver easily. (K&R (1984: 393))

まず lexicon の中で, (10a) の他動詞 *maneuver* に *out-* 接頭辞を付加し, (10b) のような文を形成する。その後, syntax の中で middle formation が適用され, (10c) のような受け入れ可能な middles ができる。この事実より, middles は syntax で派生され, middle verb は他動詞であると分析される。しかし, (11) は middles が *out-* 接頭辞付加を受けないことを示している。

- (11) a. Hedges trim well.
 b.*Hedges outtrim trees well. (K&R (1984: 394))

(10) では *out-* 接頭辞付加を行った後, middle formation を適用していたが, これとは違い, (11) では middles を形成した後で *out-* 接頭辞付加を行うと (11b) のように非文法的な文となる。以上のように, middles は *out-* 接頭辞付加を受ける場合と受けない場合がある。

4 つ目は, middles は reanalysis (再分析) を受けるが, ergatives は reanalysis を受けないという点である。reanalysis とは syntax で行われるもので, 目的語を動詞の隣りにするために動詞は前置詞を含むというものである。次の例文を考えよう。

- (12) a.[?]The room breaks into easily.
 b.*The room broke into. (K&R (1984: 400))

(12a) は middles であり, *breaks into* を動詞として再分析すると容認度はやや低くなるが, reanalysis を受けることができる。これは middles が syntactic であるという証拠となる。一方, ergatives は (12b) が示す通り, middles よりも reanalysis を受け入れられない。ergatives が lexical であるため, このような結果になると考えられる。統語規則の 1 つである reanalysis を受けるかどうかということにより, middles と ergatives がそれぞれどの場所で派生されているのかを確かめることが

ち

できる。

上記のように、middles と ergatives には様々な違いが見られる²⁾。その違いは、syntax あるいは lexicon のどちらで派生されるのかということ、そして、動詞が transitive または intransitive なのかどうかということから違いが生じると考えられる。

K&R は middles と ergatives の派生方法についても述べている。middles は (13) のように生成されると考えられる。これは passives と同じ生成方法である³⁾。

(13) a. [NP, S] は θ -role を受け取らない。

b. [NP, VP] は VP の中で case を受け取らない。

次のような例文を考える。

(14) NP Aux bribe bureaucrats easily. (K&R (1984: 401))

まず (13) に従い、(14) の主語 NP に θ -role を与えないようにし、目的語 *bureaucrats* は VP の中で case を受け取らないようにする⁴⁾。そして、 θ -role は動詞 *bribe* によって目的語 *bureaucrats* に与えられる。最後に、目的語 *bureaucrats* は case を受け取ることができる場所、すなわち、主語の位置 NP に移動する。この移動した NP *bureaucrats* は auxiliary (Aux) から case を受け取る。この過程より、*Bureaucrats bribe easily* という middles が形成される。

一方、ergatives は (15) のようなステップにより、lexicon で生成される。ここでは、(16) のような動詞 *sink* の下位範疇を使って考察する。

(15) a. 目的語から case を取り除き、主語に θ -role を与えられないようにする。

b. 目的語の下位範疇化要素が主語位置に移動する。

c. Agent を削除する。

(16) a. sink [_S NP [_{VP} _ [NP]]]

b. sink [_S NP_i [_{VP} _ [_t]]] (K&R (1984: 402))

(15a) は middles や passives でも必要とされる操作である。まず (16a)

の内側にある NP、つまり目的語から case を取り除き、主語に相当する (16a) の外側の NP に θ -role が与えられないようにする。次に (15b) で示されているように、(16a) の目的語位置にある NP を主語位置に移動させ、その結果、(16b) のように trace を残した表記になる。これは middles と同じ操作であるが、ergatives の場合 lexicon で起こる。最後に、Agent を削除するという操作が働き、ergatives が生成される。以上のように、middles と ergatives の派生方法の違いが述べられている。

上記以外にも、middles の特徴が説明される。例えば、middles は Move *a* の core case であるため、peripheral case である S'-Deletion や reanalysis が middles では適用されないと述べられている⁵⁾。(17) は S'-Deletion を適用するかどうかにより、その文が容認可能か否かを左右するということを表す。

(17) a.*John believes [_S to be a fool easily].

b. John was believed [_S to be a fool]. (K&R (1984: 407))

(17a) の S' 節 *to be a fool easily* は middles であるが、この S' は削除されることができず、S' が残された状態であるため受け入れ不可能な文となる。一方、(17b) は passives の文であるが、S' を削除できるため、受け入れ可能な文になる。

さらに、middles は驚くほど頻繁に起こり、特に “bureaucratic language” (官僚語) でよく見られると言う。官僚語の動詞の例として、*transfer*, *translate*, *transmit*, *transport*, *transpose* が挙げられている。官僚語の middles の例として次のようなものがある。

(18) Greek translates easily. (K&R (1984: 383))

以上のように、K&R は middles と ergatives を比較しながら、middles は統語で transitive であり syntax で派生されるということ、一方 ergatives は統語で intransitive であり lexicon で派生されるということ を主張している。彼らはそれぞれの統語的特徴のみならず、形態論的

交

2.1.2. Fagan (1988)

Fagan (1988) は K&R の分析に反論し, middles に関して K&R とは異なる主張を述べている。Fagan (1988) は, middles は state を示し, ergatives は event を示すということ, 及び, middles は ergatives と同様 lexicon で派生され, 双方とも統語では intransitive であると主張している。2.1.1 節で見た K&R の分析では, middles と ergatives の主な違いは transitive であるのか intransitive であるのかということだったが, Fagan (1988) によると, middles と ergatives の違いを特徴づけるには state と event のコントラストが非常に重要であると言う。Fagan (1988) にとって K&R の分析の中で擁護できないことが幾つかある。その点を順次見ていく。

第一に, middles は総称的な文で起こるという特徴を持つと述べられているが, middles は時々進行形の文で生起できる。この場合, middle verb は event verb ではなく stative verb である。例えば, (19) のような middles の進行形の文が見られる。

(19) This manuscript is reading better every day.

(Fagan (1988: 182))

(19) は「原稿が日常で改善され, 前よりも徐々に良くなってきている」という継続的な状態の変化を表す。したがって, middles の特徴を示すには stative verb と同じ特徴を持つということ述べる必要があると Fagan は説明している。この事実より, middles は state を示す文であるということ支持できる。

第二に, *out-* 接頭辞付加に関する考察が述べられている。K&R は middles が transitive であるため, *out-* 接頭辞付加を受けないと分析していた。ところが, Fagan (1988) は全ての自動詞が *out-* 接頭辞付加を受けるとは限らず, 特に stative verb はその派生を受けることができないと指摘している。例えば (20) で示すように, stative verb *believe* に *out-* 接頭辞を付加することができない。

(20) *John outbelieves everyone. (Fagan (1988: 191))

Fagan は middles が stative であるため, *out-* 接頭辞付加を受けることができないと主張している。

さらに, Fagan は reanalysis (P 残留) についても反論している。(21) は (12) と同じ例文であるが, 容認可能か否かの標示が異なる。

(21) a.*The room breaks into easily.

b.*The room broke into. (Fagan (1988: 192))

K&R の分析では, middles は P 残留をやや受け入れることができるが, ergatives は P 残留を受け入れることができないとされていた。しかし Fagan は, (21a) と (21b) の違いは P 残留によるものではないということ, さらに middles の P 残留は ergatives と同様受け入れられないと指摘する。また, ergative verb は [+causative] という素性を持つ述語からしか派生されないと指摘される。動詞句 *break into* の素性は [-causative] であるため, (21b) のように ergatives にすると非文法的な文になると述べられている。このように, P 残留の事実は middles 形成が syntactic ではなく, lexical であるという証拠になるとされている。

上で述べたように, Fagan は middles と ergatives の違いは stative と eventive の違いが大きな要因となると考え, K&R の分析には幾つかの矛盾点があるということを指摘している⁶⁾。

Fagan は middles の派生方法の代案として, 次のような語彙規則を提案している⁷⁾。

(22) a. 外項に与えられる θ -role に arb (arbitrary interpretation) を与える。

b. 直接的目的語 θ -role を外在化する。

(22a) の arb とは任意の解釈のことであり, [+human, +generic] のような素性を持ったもの, つまり, *people in general* というような語句が当てはまる。(22a) の規則により, 語彙項目が middles に変形される時, 語彙項目の外項に与えられる θ -role が任意に省略される。次に, (22b)

突

を適用する。直接的目的語 θ -role とは、動詞の直接目的語に付与される θ -role のことである。(22b) の規則を適用すると、直接的目的語 θ -role を主語と連結させることができる。加えて、動詞が transitive から派生され intransitive になるため、middles は統語で intransitive であるということと一致する。

以上のように、Fagan (1988) は middles と ergatives の違いを特徴づけるには stative と eventive のコントラストが重要であること、そして middles は ergatives と同様 lexicon で生成されることを主張している。Fagan の意見は K&R の説明とは異なる部分が多くある。極端に言えば、middles と ergatives の違いは副詞の有無のみであるということも Fagan は述べている。

2.2. García de la Maza (2011) による意味的・語用論的調査

García de la Maza (2011) は middles の意味的・語用論的性質を研究している。この構文の意味的・語用論的な特徴はあまり注目されていないと言う。García de la Maza (2011) によると、middles に必要な要素は (i) 主語の property reading, (ii) newsworthy information, (iii) 表現されない Agent argument を持つこと, (iv) 容易さを表すこと, (v) modality, (vi) non-eventiveness である⁸⁾。本稿では、(i) (ii) (v) のみに焦点を当てる。

第一に、middles の意味の特異性を表すものとして、主語の property reading (特性の読み) が挙げられている。これは、主語の表す特性が動詞の表す行為の実現に責任を負うということである。次のような文が見られる。

(23) Love stories read easily. (García de la Maza (2011: 161))

(23) は「*love stories* の読みやすさの責任を負うのは、*love stories* の何らかの特徴である」ということを表している。これが middles の主語の property reading と呼ばれ、middles の重要な特徴と考えられている。

第二に, middles が可能となるためには, newsworthy information (ニュース価値のある情報) を与えることが必要だと述べられている。例えば, (24) と (25) のような例がある。

(24) ?Cars wash well. (García de la Maza (2011: 165))

(25) This jumper washes well. (García de la Maza (2011: 165))

(24) の NP *cars* は不定の主語である。この文には特別な文脈が含まれず, 「洗車できるのは, 車の固有の特質である」という解釈を持つ。すなわち, (24) は一般的なことを述べているため, newsworthy information を伝えていない。したがって, (24) はやや受け入れ可能な文となり, 語用論的には妥当ではない。一方, (25) の NP *This jumper* は定の主語である。この文は「サイズ, 素材, 色など様々なジャンパーがある中で, このジャンパーは洗いやすい」という意味を持ち, newsworthy information を伝えている。これにより, (25) は容認可能な middles になる。このように, 伝える価値のある情報が含まれているかどうかにより, middles の容認可能の度合いが左右される。主語の特質と動詞が表す行為の関係が middles の容認性を決める。

第三に, middles は典型的に modality (法性) に関与すると考えられる⁹⁾。例えば, 次のような文がある。

(26) a. Back-pac straps tuck neatly away.

b. Back-pac straps can be easily tucked away.

(García de la Maza (2011: 169))

middles である (26a) を modal verb の一種である *can* を使って言い換えると, (26b) のように文法的に正しい文となる。

García de la Maza (2011) は, 以上で紹介したことを middles の重要な要素として考える。その他にも, middles は意味的に自動詞の文として表わされるということ, そして, 語彙化プロセスを受けるものもあり, 特殊な意味を持つということも述べている。

2.3. Fellbaum (1985) による Middles の副詞の特徴

Fellbaum (1985) は patient-subject construction (PSC) と呼ばれる構文を分析している。PSC は middles と同じ構文であるが、Fellbaum は PSC という呼び方で説明している。PSC は (27) で示されているように、主語は意味的に他動詞の patient であるが、能動文である。また、PSC は agent によって行われる意図的で可能な行動を示す¹⁰⁾。

(27) This dog food cuts and chews like meat. (Fellbaum (1985: 21))
Fellbaum は PSC の副詞の分析を通して、PSC の意味や機能を詳しく述べている。

Fellbaum によると、PSC に関する制限が2つある。1つ目は、ある PSC は副詞が現れなくても良いが、他の PSC は副詞が必要であるということである。(28) と (29) のコントラストを考える。

(28) *This magazine reads. (Fellbaum (1985: 22))

(29) This magazine sells. (Fellbaum (1985: 23))

双方とも副詞が現れていない PSC である。(28) は「この雑誌は読める」という解釈の PSC であるが、主語の *magazine* の属性を伝えるための有益な情報を提供していない。雑誌というものは当然読まれるものであり、*readability* と雑誌は固有の関係にある。このように主語と述語の意味関係が固有である場合、どのように読めるのかという有益な情報が必要である。したがって、(28) の PSC は副詞が存在しないため、文法的に正しくない文になる。一方、(29) は「この雑誌は売れる」という意味を持ち、雑誌の属性を伝えるための有益な情報を述べている。*magazine* にとって *sellability* は固有のものではないため、(29) は副詞が現れなくても容認可能な文になる。*middles* は副詞が存在するという特徴が頻繁に述べられているが、Fellbaum は上述のように副詞が現れないものもあると議論する。

三 2点目に、Vendler (1984) の副詞の分類に従い、PSC に現れる副詞と現れない副詞を述べている¹¹⁾。4つのタイプの副詞について紹介し、

どのタイプがPSCに使われるのか、あるいは使われないのかを分析している。

まず、PSCで用いられる副詞として、“facility” adverbが挙げられている。このタイプの副詞はどのようにある行動が行われるのかを述べ、主な例として *easily* がある。

(30) These chairs fold up easily/quickly/in a jiffy.

(Fellbaum (1985: 24))

(30) は「畳みやすいのは椅子の性質である」ということを含意し、特定の特性が agent でなく、patient の椅子にあるとしている。middle で用いられる副詞の多くはこの分類に属する。*easily* の他にも、(30) にあるように *quickly* や *in a jiffy*, さらに *with great difficulty*, *without problems* などがこのタイプに分類される。これらの副詞は容易さや agent の能力を表していないが、誰かがどのようにして行動を成し遂げるのかを示す。

PSCと共起できる副詞のもう1つのタイプとして、“event” adverb がある。これは、行為の間あるいは行為の結果として、patient に起こったことを表し、patient に焦点が置かれる¹²⁾。“event” adverb が使われているPSCは(31)のように例証されている。

(31) This dog food cuts and chews like meat. (Fellbaum (1985: 26))
patient-subject である *This dog food* は副詞 *like meat* によって「犬の飼い主が切ることができ、犬が噛むことのできる肉のようなドッグフード」として示されている。このように、PSCで現れる副詞は patient の特性を表している。

一方、PSCで現れない副詞として2つのタイプが挙げられている。1つ目は“moral” adverbと呼ばれ、「精神状態」を示すものである。例えば、*accidentally*, *deliberately*, *intentionally* などがある。

(32) *This paint sprays on intentionally. (Fellbaum (1985: 26))

(32) の副詞 *intentionally* は人の精神を表す語である。(32) の場合、塗

三

装する人がいて、その人を暗に修飾している。このように、agent 指向の副詞がこのタイプに分類されている¹³⁾。patient を主語とする PSC にはこのような副詞と共起できない。

PSC で使われない副詞の 2 つ目のタイプは “positing a certain trait in the agent” adverb である。これは副詞によって表現された性格を agent が持っていることを表す。つまり，“agent-specific”（動作主指定の）であるということである。

(33) *This dog food cuts and chews slowly. (Fellbaum (1985: 27))
副詞 *slowly* は agent がどのような人でどのように行動するのかが指定するものであるため、(33) のような patient-subject の文で現れると非文法的になる。

Fellbaum は以上のような PSC に用いられる副詞の分析を通し、PSC において焦点が置かれるのは patient の特質であると主張している。PSC つまり middles には通常、副詞が存在すると言われているが、Fellbaum の分析によると、副詞が現れなくても良いものも見られる。そして、PSC と共起できる副詞と共起できない副詞があるということが明らかにされている。

2.4. Levin (1993) による Middle Alternation の分析

Levin (1993: 25-26) は middles を middle alternation という表現を使って説明している。Levin によると、middle alternation とは特定の時間の表示がなく、暗黙で表現されない agent を持ち、副詞または modal な要素を含むものだと考えられている。加えて、Levin は middle alternation を causative/inchoative alternation と比較している。この causative/inchoative alternation とは ergatives のことであり、Levin によると、middle alternation と causative/inchoative alternation は逆の特徴を持つ。つまり、causative/inchoative alternation は特定の時間が表示され、暗黙の agent を持つ必要がなく、副詞を含む必要もない。

さらに、Levin は middle alternation に起こる動詞と起こらない動詞を分析し、リストにしている。それぞれ膨大な数の動詞が挙げられているため、本稿では一部のみ挙げる。

(34) middle alternation に起こる動詞

[*Coil Verbs*] coil, curl, loop, roll, spin, *etc.*

[*Slide Verbs*] bounce, float, move, roll, slide

(35) middle alternation に起こらない動詞

[*Verbs of Putting in a Spatial Configuration*]

hang, lay, sit, stand, *etc.*

[*Send Verbs*] convey, deliver, hand, mail, send, transfer,

transport, *etc.*

以上のように、middles で起こる動詞と起こらない動詞が区別されていることにより、middles を可能とする動詞の特徴が存在するように思われる。Levin の分析では middles を許す動詞と許さないものが数多く挙げられているが、その動詞の特徴は詳しくは述べられていない。

2.5. まとめ

本節で扱った middles に関する先行研究のポイントをここでまとめる。middles の重要な特徴として考えられることが7つある。1つ目に middles は ergatives と passives に似ているということが挙げられる。この点は本稿で見てきた全ての先行研究で示されている。2つ目は、2.1 節から 2.4 節までに言及されていたように、middles は通常副詞と共に起するという点である。Fellbaum (1985) の分析によると、middles で使われる副詞は “facility” adverb と “event” adverb であり、patient の特性を表すものが許される。agent 指向にある “moral” adverb や “positing a certain trait in the agent” adverb は middles では使われない。3点目は、middles は implicit agent を持つということであり、この点に

態

る。

4つ目以降は、本稿で紹介した先行研究の中で3件以上が指摘する、*middles* の重要な特徴をまとめる。4つ目は、*middles* に現れる主語の θ -role は theme または patient であるということである。この特徴は、2.1 節、2.2 節、2.3 節において、K&R、García dela Maza (2011)、及び Fellbaum (1985) が説明している。5つ目の特徴として、*middles* は総称的な文で起こるということが挙げられている。これは2.1 節、2.3 節で見えてきた K&R、Fagan (1988)、Fellbaum (1985) が議論していたことである。6つ目に、2.1 節、2.2 節より、*middles* は stative であるということが挙げられる。7つ目として、*middles* には主語の特性の読みが必要である。2.2 節、2.3 節の García dela Maza (2011) 及び Fellbaum (1985) が、これについて述べている。*middles* の主語は patient であり、その特性を示すという点が *middles* 特有の性質である。

上で述べたこと以外にも、*middles* の特徴として考慮する必要があると思われるものが幾つかある。まず K&R と Fagan (1988) が示したように、*middles* は *out*-接頭辞付加などの語彙プロセスを受けないということである。そして、*middles* は Move *a* の core case であるため、peripheral case である S'-Deletion や reanalysis を受けることができない。また K&R によると、*middles* は “bureaucratic language” でよく見られる。Levin (1993) の分析にあるように、*middles* に起こる動詞と起こらない動詞があるということも押さえておきたい。最後に、*middles* は modality に関与するということである。この点については García dela Maza (2011) や Fellbaum (1985) の考えによるものである。

しかしながら、一連の先行研究を調査していく中で、*middles* について不明な点が幾つかある。1つ目は、*middles* が派生される場所についてである。2.1 節で見たように、K&R はその構文が syntax で生成されると考えたが、一方 Fagan (1988) は lexicon で生成されるという主張を述べている。どちらの場所が *middles* の派生場所として正しいのか

明らかでない。2つ目は, middles は統語で transitive なのか, あるいは, intransitive なのかという点である。これについても, K&R と Fagan の意見が対照的であり, どちらが正しいのかということが不明である。これらの2点については, K&R と Fagan 以外の研究の中でも意見が分かれ, 現時点ではどちらの考えが適切かどうか判断できない。また, middles における副詞の有無についても興味深いことがある。middles と ergatives の違いは副詞の有無のみであると述べた Fagan (1988) の意見のとおり, middles には副詞が存在するという特徴は多くの研究で明らかにされている。ところが Fellbaum (1985) によると, 副詞が存在しなくても良い middles があるという。この事実は, 従来明かされていた middles の特徴との矛盾点になる。middles の副詞についても今後注目すべき事柄だと思われる。

3. 先行研究の問題点と提案

前節でまとめた先行研究が示すように, middles には様々な特徴や制限がある。その特徴について4つの問題点と提案を挙げる。まず3.1節で, 総称的な文で起こるといふ middles の特徴について述べる。3.2節では, *out-* 接頭辞付加を受けることができる middles と middles の派生方法について述べていた K&R の分析について筆者の意見を提示し, 3.3節では middles で起こる動詞と起こらない動詞の分類についての問題点を挙げる。最後に3.4節では, middles が implicit agent を持つという特徴についての新たな証拠と, その分析に基づいて考えた middles 生成の場所についての筆者の見解も加える。因みに3.1節と3.3節では, 大規模コーパス British National Corpus (BNC) で middles の表現を収集し, 先行分析が明らかにしてきたことが正しいのかどうかを検証する。

3.1. 総称性

middles は総称的な文で起こるといふ特徴について考察する。BNC と

呼ばれる 1 億語の大規模コーパスで middles を検索した結果、先行研究で明らかにされていた通り、ほとんどが単純現在形の文で現れる。しかし、(36) のように middles の進行形の文が見られる。

(36) Country properties were not selling well at the time.

(BNC: CDB)

Fagan (1988) によると、時々起こる middles の進行形の文は stative であると考えられる。したがって、middles が総称的な文で起こると言うことは完全には言えないのではないかと思われる。

3.2. Out- 接頭辞付加と Middles の派生場所

K&R の分析では、middles は *out-* 接頭辞付加を認可するものとしな
いものがあり、syntax の中でこの語彙規則が適用されると論じている。
一方、Fagan (1988) は middle verb が stative であるため、*out-* 接頭辞
付加を受けることができないと述べている。この議論について見てい
く。

まず、2.1.1 節で用いた (10) の例文 (= (37)) を考察しよう。

(37) a. They maneuver the Russians easily.

b. They outmaneuver the Russians easily.

c. The Russians outmaneuver easily. (K&R (1984: 393))

K&R は、まず lexicon の中で (37a) の他動詞の構文に *out-* 接頭辞付
加を適用し、(37b) のような文を形成した後に syntax の中で middle
formation を適用し、(37c) のようになると考えた。したがって、K&R
は middles が syntax で派生されると主張した。ところが、接頭辞 *out-*
は自動詞あるいはゼロ目的語の他動詞に付くという条件があるのにも関
わらず、他動詞 *maneuver* に接頭辞 *out-* が付く。この *out-* はどの時点
で付加されるのだろうかという問題点が残る。

至

García dela Maza (2011) によると、頻度が高い middle verb は語彙
化のプロセスを受け、その動詞の意味が特殊化されることがあると言わ

れている。例えば、動詞 *sell* や *read* で形成される middles は頻度が高く、語彙化されると考えられている。語彙化された middle verb は語形成の入力になりうるため、(38) のように動詞 *sell* は *out-* 接頭辞付加を受けるとされている。

(38) This model outsells all the others in our range.

(García dela Maza (2011: 172))

(38) の動詞 *outsell* は「～より高く売れる」という意味を持つ。

この考えより、動詞はまず *lexicon* の中で middle verb として派生され、語彙化された後に *out-* 接頭辞付加のような語彙形成プロセスを受ける。それゆえ、(37c) は (39a), (39b), (39c) の順に *lexicon* の中で派生され、*out-* 接頭辞付加が適用されたのではないかと思われる。

(39) a. They maneuver the Russians easily.

b. The Russians maneuver easily.

c. The Russians outmaneuver easily.

最初に基底文の (39a) に middle formation を適用し、その結果が (39b) になる。その後 (39b) に *out-* 接頭辞付加を適用し、(39c) のように形成されたと考えられる。(39b) の動詞 *maneuver* は表層上自動詞であるため、*out-* 接頭辞付加の条件を満たすことができる¹⁴⁾。この分析から、middles は lexical であり、middle verbs は intransitive であるのではないかと考えられる。

3.3. Middle Formation を受ける動詞と受けない動詞

数多く存在する英語の動詞の中でも、middles で使われる動詞と使われない動詞がある。本節では、K&R と Levin (1993) の分析を検証し、middle formation を受けることができる動詞とできない動詞について見ていく。

まず K&R は、middles が *transfer*, *translate*, *transmit*, *transport* のような “bureaucratic language” でよく使われると述べている。ところ

矣

が、次のような矛盾点がある。まず BNC で “bureaucratic language” の動詞を検索したところ、動詞 *transmit*, *transport* の middles は見つからなかった。その上、Levin (1993) の middle alternation のリストでは、*transfer*, *transport* は middles になれない動詞として分析されている。しかしながら、動詞 *transfer* の middles は (40) のように BNC で見られる。斜体部は middles を表す。

(40) Many of the techniques of scientific management have been developed in private industry and commerce. *They do not always transfer easily to the public sector.* (BNC: ED5)
それゆえ、今後 “bureaucratic language” の動詞を詳しく調査する必要があると思われる。

また、2.4 節で概観した Levin (1993) の middle alternation のリストに関しても不備な点がある。例えば (34) で挙げたように、*Coil Verbs* や *Slide Verbs* は middle alternation を受けると分析されている。ところが、そのほとんどが BNC で検索できなかつたため、これらの動詞が middles で起こらないことが予想される。今後、native speaker によるインフォーマントチェックを行って確認する必要がある。さらに (35) で示されているように、動詞 *hang* は middle alternation を受けることができない動詞として分類されているが、BNC で次のような文が見られる。

(41) Marjorie helps him on with his camelhair overcoat, a garment she persuaded him to buy against his better judgement, for it *hangs well* below his knees and, he thinks, accentuates his short stature, as well as making him look like a prosperous bookie. (BNC: ANY)

斜体部にあるように、動詞 *hang* は middle formation を受けることができるようである¹⁵⁾。Fagan (1988) は、動詞のどのような意味の特徴が middle formation を受けることを可能にするのかという問題が解決され

ていないと指摘している。

以上の事実より、middle alternation を受ける動詞と受けない動詞の分類を調査し直す必要があると思われる。現段階では、BNC のみでしか事実観察ができていないため、より数多くの種類のデータを集め、インフォーマントチェックを受けた上で動詞を分類していくことを今後の課題としたい。

3.4. Implicit Agent の存在と Middles の派生場所

本稿で紹介した先行分析全てが、middles は implicit agent を持つと述べている。その典型的な特徴に関する新たな証拠、そして、その分析に基づいて提案した middles の派生場所について議論する。

Grimshaw (1990) は argument structure が thematic hierarchy に従って構成されると主張する。その研究の中で、「middles は抑制される argument position (*by* 句などの a-adjunct) を持たない」という論述がある。例えば (42) の例があり、(43) は (42) の middle verb *read* に関する argument structure である。

(42) *These books read well by children. (Grimshaw (1990: 136))

(43) read ((*x*)) (Grimshaw (1990: 136))

(42) は抑制される句 *by children* が存在するため非文法的な文となる。これより、middles が implicit agent を持つという特徴を支持できると考えられる。また、(43) の *x* は theme を表し、(42) では NP *These books* が *x* に相当する。(43) のような argument structure に着目することにより、それぞれの動詞がどのような構文を可能とするのかどうか考えることができる。argument structure が重要だと仮定すると、middles は lexicon で派生されているということになるのではないかと考えられる。Fagan (1988) は middles の特徴を説明するには、意味構造が必要であると述べているが、middles の意味構造について詳しく分

のが middles に関連しているのかという点については今後の課題とし、詳しく分析したい。

4. 結び

middles は ergatives と passives のように表面上 intransitive であり、1つの項をとる。その主語の θ -role は theme または patient であり、implicit agent が含まれ、通常副詞と共起するということが典型的な特徴として明らかにされている。ところが、middles の特徴について明らかにされていないことがまだ残されている。とりわけ、middles は syntax あるいは lexicon のどちらで派生されているのかということを実時点では決めることができない。しかし、argument structure や意味構造も関係しているという点より、幅広い領域で分析する必要があると思われる。加えて、middles の特徴を説明するためには、ergatives や passives など様々な構文と比較する必要がある。

middles の特徴や派生方法に関して、統語論、形態論、語彙論、意味論の観点で幅広く考えていくことを今後の課題とする。また、middles が *out*-接頭辞付加などの語彙化プロセスを受けるかどうかを確かめるためにデータを収集し、分析したい。そして、数多くの middle formation を受ける動詞と受けない動詞の例文を BNC などで検索し、インフォーマントチェックを行う。動詞のみならず、middles に欠かせない副詞の要素についても着目し、middles で用いられる副詞にはどんな種類のものがあるのか、あるいは、副詞がなくても受け入れ可能な middles が実際に使われているのかどうかということも検証したい。

注

- 1) ergatives は、本来他動詞の目的語であるべき要素が自動詞の主語となり、他動詞が自動詞に交替して生じる構文である。この構文は unaccusatives (非対格) と呼ばれることもある。(i) は他動詞構文で

あり, (ii) は (i) に ergative formation を適用した結果である。

(i) The wind broke the window.

(ii) The window broke. (中村・金子 (2002: 47))

(i) の目的語 *the window* が (ii) では主語になり, 動詞 *broke* は ergative formation によって表面上自動詞となる。(i) の基底文より, (ii) の ergatives には agent が元々存在している。この文では NP *the wind* が agent であるが, ergative formation を適用した後で削除される。

一方, passives も本来他動詞の目的語であるべき要素が自動詞の主語となって生じる。(iii) を passives にした文が (iv) である。

(iii) John invited Mary.

(iv) Mary was invited (by John). (中村・金子 (2002: 51))

(iii) の agent である *John* は (iv) の passives で *by John* と表わされるが, この句は任意である。したがって, passives の agent は任意に現れる。

2) K&R は本稿で紹介した middles と ergatives の相違点以外にも, 様々な違いを述べている。例えば, middles は (i) のように *away* と共起できないが, ergatives は (ii) のように *away* と共起できるという特徴がある。

(i) *The bureaucrats bribe *t* away easily. (K&R (1984: 392))

(ii) The ships are sinking away. (K&R (1984: 393))

away は intransitive verb のみと共起し, 「～し続ける」という意味の動詞句を形成すると言われている。(i) のように middle verb である *bribe* は *away* と共起できないことから, middles は transitive であるということになる。一方, ergatives は (ii) のように *away* と共起できることから, ergative verb は基底では intransitive であるという結果に至る。

3) 次のような passives の文を考える。

(i) NP Aux kicked the ball.

(ii) The ball was kicked.

(i) は (ii) の基底文である。[NP, VP] の *the ball* は過去分詞 *kicked* から case を受け取ることができない。しかし case filter の制限より、NP は必ず case を受け取らなければならない。NP *the ball* は case を受け取ることができる場所 [NP, S] に移動し、Aux (Auxiliary) から case を受け取る。

4) middle verb である *bribe* は、意味を考えると「賄賂が送られる」という受身を表す。その点が受動文における過去分詞と意味が似ているため、動詞 *bribe* は目的語 *bureaucrats* に case を与える力がないと見られる。

5) K&R では core と peripheral (exceptional) の定義が詳しく書かれていないため、その境界線が不明である。Fagan (1988: 194) も同様に指摘している。

6) Fagan (1988) による K&R の分析に対する反論は、本稿で紹介したもの以外にも幾つか述べられている。例えば、注 2 で示した *away* との共起について触れている。K&R は「middles が基底では transitive であるため、*away* と共起できない」と考えていたが、Fagan (1988: 190) は「middle verb が stative verb であるため、*away* と共起すると受け入れられない文になる」と述べている。

7) Fagan (1988) は Rizzi (1986) による「 θ -role の saturation の概念」を使い、middles の派生方法を提案した。例えば、次のような例文がある。

(i) This sign cautions people against avalanches.

(ii) This sign cautions against avalanches. (Rizzi (1986: 501))

(ii) では (i) に現れていた *people* が省略されている。Rizzi によると、私たちが「誰が何をするのか」ということがわかっている時、 θ -role は saturate (飽和) されるという。saturation は通常、Projection Principle と θ -Criterion によって syntax で行われる。しか

し, saturation は lexicon でも起こることができると Rizzi は議論した。さらに, 以下のような規則が lexicon で適用されると述べている。

(iii) 直接的目的語に与えられる θ -role に arb を与える。

この規則により, understood argument の θ -role が適正に saturate されることが証明できるという。Fagan (1988) はこの規則を活かし, (22) のような middles の派生方法を提案した。

8) non-eventiveness は stativeness と同じである。

9) 安井 (1996: 445) によると, modality とは mode (=mood) に由来する語であり, 伝統文法においては modal auxiliary (法助動詞), 法副詞 (modal adverb) などの文法形式またはその代用表現によって表される, 文の内容に対する話し手の心的態度をいう用語として用いられてきた。心的態度とは, 発話内容にどの程度の確実性・可能性・蓋然性・必然性などがあると話者が認めているかを言う。英語の modality は modal auxiliary を中心に研究される。例えば, *can* は可能性, *must* は義務, *will/would* は蓋然性, *may* は許可, *should* は命令という意味を持つ。

10) PSC には主に 2 つの特徴がある。第一に, その構文は doability (可能性) を表す。

(i) This car handles smoothly.

(ii) ?People, in general, handle this car smoothly.

(Fellbaum (1985: 21))

(iii) People, in general, can handle this car smoothly.

(Fellbaum (1985: 22))

(i) の PSC に *people, in general* という語句を挿入したものが (ii) であるが, 容認可能度がやや下がる。一方, (iii) は (i) に *people, in general* を挿入し, 可能性を表す法助動詞 *can* を挿入したものである。(iii) は (ii) よりも受け入れ可能であり, (i) を言い換えるならば (iii) のような文がふさわしいと言える。この事実より, PSC 自体に可能

吾

の意味が含まれていると言われている。

第二に、PSC は generic (総称的) を表す。

(iv) *The tent puts up in my backyard.

(v) The tent puts up in your/one's/anybody's backyard.

(Fellbaum (1985: 22))

(iv) にある *my* が「私の」という特定の意味を表すため、この文は受け入れられない。しかし、(v) のように「一般の」を示す所有格 *your* などを使うと受け入れ可能な文となる。したがって、PSC は総称的な性質を持つ文であると言える。

- 11) ここで紹介されている副詞とは、行動や実行の様子を修飾するものとして分析されている。
- 12) “event” adverb に関して、誰かがどのようにして行動を実行しているのかを示すという説明がある。この特徴は “facility” adverb の説明に似ている部分があるため、この2つのタイプの副詞の区別がはっきりしていないと思われる。
- 13) Fellbaum (1985) は “moral” adverb が agent 指向であるという説明をしていない。
- 14) 動詞 *maneuver* はあまり頻繁に使われる動詞とは言えず、middle verb として語彙化されるかどうかということに疑問が残る。K&R が分析したように、middles は例えば、動詞 *transfer* のような “bureaucratic language” でよく見られる。*transfer* に接頭辞 *out-* が付加された *outtransfer* という動詞が実際に使われるのかどうか BNC で確認したところ、*out-* 接頭辞付加を受ける “bureaucratic language” の動詞を検索することができなかった。今後、*transfer* などの “bureaucratic language” の動詞に接頭辞 *out-* が付加された語が見られるのかどうかを、インフォーマントチェックを行い、調査したい。
- 15) 動詞 *hang* は「ぶら下げる」という意味の他動詞と「ぶら下がる」という意味の自動詞の両方を持つ。(41) の *hang* は自動詞であ

兎

り、middle verb ではないと考えることもできる。しかし、(41) の *it hangs well* は「コートが上手く掛けられる」という意味で捉えられることができ、コートが上手く掛けられている状態を表す。加えて、implicit agent が含意し、「誰かがコートを掛ける」という解釈になる。動詞の形も現在形であるため、middles の条件を多く満たしていると考えられる。これにより、(41) の動詞 *hang* は middle verb の一例として挙げる。但し、BNC で動詞 *hang* が「誰かがぶら下がる」という意味で使われることが多いようであれば、その動詞は自動詞用法になり、(41) が middles の例であると考えことは難しくなる。動詞 *hang* が *Something hangs well* という middles で表わされることができるとどうかを確かめるため、インフォーマントチェックを行い、調査することを今後の課題としたい。

参考文献

- Fagan, Sarah M.B. (1988) "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 181-203.
- Fellbaum, Christiane (1985) "Adverbs in Agentless Actives and Passives," *CLS* 21, Part 2, 21-31.
- García dela Maza, Casilda (2011) "The Semantics of English Middles and Pseudo-middles," *Morphosyntactic Alternations in English*, ed. by Pilar Guerrero Medina, 161-181, Equinox, London.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, The University of Chicago Press, Chicago.
- 松瀬育子・今泉志奈子 (2001) 「中間構文」『日英対照 動詞の意味と構

- 文』 影山太郎（編）184-211 大修館書店 東京 .
- 中村 捷・金子義明（2002）『英語の主要構文』 研究社 東京 .
- Rizzi, Luigi (1986) “Null Objects in Italian and the Theory of *pro*,”
Linguistic Inquiry 17, 501-557.
- Vendler, Zeno (1984) “Adverbs of Action,” *CLS* 20, Part 2, 297-307.
- 安井 稔（1996）『コンサイス英文法辞典』 三省堂 東京 .